

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 373 回 「三低主義」の奨め

2010.7.11

チョイと前まで、男のもてる条件は「三高」(高学歴、高所得、高身長)といわれていた。今もきっと、そんな男がもてるのかもしれない。が今、「三低」(さんてい)という新たな価値観が生まれている。今回はこのユニークな発想を紹介したい。

三つの低とは「低姿勢、低依存、低リスク」を指す。かつてバブル崩壊時に、「三」が求められる時代になると評論家の赤塚行雄氏が提案したことを思い出す。「地味で、実力派の、じいさん」の活躍が期待されるというものだったが、「三低主義」とどこか通じるものがある。

この価値観の発端は、建築家の隈研吾氏と評論家の三浦展氏の対談集・『三低主義』(NTT出版)である。たとえば、女性に向かって威張らない、家事や育児で女性に頼ってばかりいない、失業の恐れがなく健康である、ということらしい。今の時代もてる男は、「リスクのない仕事をしている」「家事を女性任せにしない」「上から目線で話さない」タイプで、「草食系男子」などの言葉にも表れており、一昔前の「三高」とは大違いのようだ。

実生活面、社会的分析はともかくとして、色々な意味で、負荷がかからない、やさしい安定した状況を求めているという姿勢のようだ。根底には、省エネ、環境に優しい、負荷をかけないということだろうか、あらゆる分野でこの動きが顕著になってきているようである。

自動車業界も、ハイブリッド車や電気自動車は、確かに「三低の時代」にふさわしい。言い換えれば「低リスク=安い、低依存=エコ、低姿勢=かわいい」が時代のキーワードとなっているのかもしれない。

中小企業の経営者の姿勢も夢も、そして価値観すら、時代と共に大きく変わりつつあるようだ。早く大企業に追いつきたい...従業員を増やし、売上を倍増し、支店や営業所を全国に拡大していく。資本金を増資し一刻も早く上場させる。

これが「人が憧れる企業」としての究極的な姿であり、中小企業といえども、社長としては、その「夢」の実現を目指して日夜努力する。たぶん今まで、そんな経営戦略を持ち続けてきた。

人間も会社も、できることは限られている。無理を続け歪曲(わいきょく)し捏造(ねつぞう)し、歪(いびつ)になりながら、そんな会社を創造することが、果して本当の夢だったのか？

マネーゲームを繰り返し、巨大なコングロマリット(conglomerate)を築き上げ、若者の羨望(せんぼう)の眼(まなこ)になったニューウェーブ経営者達、砂上(さじょう)の楼閣(ろうかく)が一瞬のうちに崩れ去った光景を見せ付けられ、その価値観は大きく変貌した。

従業員が沢山いて、巨額な売上と資本金、巨大なビルの会社が、「いい会社」の見本ではなくなってきた。お客様に心から愛され、従業員が遣り甲斐の持てる会社、ボランティア精神に根付き社会貢献に努め、キラリと光る素材がある会社、その基準は規模の大きさではないはずである。そのためには経営方針も、何でも「所有(私有)」する物的価値観から、「賃貸」・「共有」への移行もあるかもしれない。

規模を争い、拡大・拡張を至上とする価値観から、この「三低」主義のような新たな考え方は、分相応の質的充実努力を繰り返す中小企業にとっては、新時代の新たな目標になりえると思う。分相応の、つまり、「身の丈経営」こそ、これからの時代のキーワードかもしれない。目指せ、「身の丈経営」。「三低」思想、大歓迎と言っておこう！